

# 「藤原宮御井歌」の基盤 — 祈年祭祝詞を視点として —

吉村 誠

The Basics of “Fujiwara no Miya Mii no Uta” –from the Perspective of Kinensai-Norito–

YOSHIMURA Makoto

(Received September 27, 2019)

## 一 はじめに

「藤原宮御井歌」は、宮殿の御井を讃えることによって藤原宮を讃美した歌であるが、国見表現の体裁になっており、四周の山を讃美し、その中心にある宮殿の清水の永遠性を述べるという構成になっている。また短歌は御井に代々仕える処女への羨望を述べることによって讃美表現としている。

しかし同時代の人麻呂の宮殿讃美歌とは異質であり、特異な表現を含んでいる歌と見られている。作者名は記されておらず、人麻呂作ともあるいは祝詞的な用語が見られるので、中臣氏の作になるものという論<sup>1</sup>もある。

しかしここで見られる四周の山は中西進氏や吉田義孝氏、辰巳正明氏により中国における都城鎮護の山の例を掲げて、宮殿鎮護的な役割で描かれていると説かれている<sup>2</sup>。中西氏は吉野山を秦の都咸陽を守る終南山に比定され、吉田義孝氏は、中国古代の四鎮五嶽の思想に基づくとされる。また辰巳正明氏は四鎮を基本とした方位思想に基づいた初めての都市景観の出現であるとされる。しかし一方で国見表現に由来する神観念に基づいた受容背景もあるはずである。辰巳氏は聖水思想に基づいた折口信夫以来の御井の観念に触れておられるが、さらに具体的な神概念に基づいた伝統的視野があると思われる。そうした中で、藤原京の地勢を基本にした神々への奉幣を述べているものに「祈年祭祝詞」がある。ここには畝傍、耳成、吉野の山々に対する奉幣記述があり、奉幣の理由が述べられている。そして中国思想とは異なった日本古来の概念が描かれている。

そこで本稿では歌に描かれている四周の山を中心に、  
「祈年祭祝詞」と比較しながら、それらの観念を確認し、藤原御井歌を構成する事物の観念を考えてみたい。

## 二 「藤原宮御井歌」に描かれる四山の解釈

ここで歌を示す。

藤原宮御井歌

やすみしし 我ご大君 高照らす 日の皇子 荒栲の  
藤井が原に 大御門 始めたまひて 埴安の 堤の上  
に あり立たし 見したまへば 大和の 青香具山  
は 日の経の 大御門に 春山と 茂みさび立てり 畝  
傍の この美豆山は 日の緯の 大御門に 瑞山と 山  
さびいます 耳成の 青菅山は 背面の 大御門によ  
ろしなへ 神さび立てり 名ぐはし 吉野の山は か  
げとも 大御門ゆ 雲居にぞ 遠くありける 高知  
るや 天の御蔭 天知るや 日の御蔭の 水こそば と  
こしへにあらめ 御井のま清水 (巻1・52)

短歌

藤原の大宮仕へ生れ付くや娘子がともは羨しきろ  
かも (同・53)

右歌作者未詳

後に触れるので「美豆山」は原文表記、「ま清水」は「きよみず」と訓読に揺れがあるが、ここでは「ま清水」と訓んでおきたい。

この歌の特徴は、天皇が国見を行っている構図から、四周の山讃めを行いその中心にある宮殿の井戸を讃美することにある。四周の山は、宮殿の永遠性をもたらす聖山として描かれている。しかしここで注意しなければならないことは、ここに描かれる大和三山が発掘調査を踏まえると、必ずしも宮殿立地の契機とされているとは言えないことである。小沢毅氏や椎野稔文氏は、橿原考古学研究所による藤原京発掘調査を踏まえて、天武朝の頃北に通じる下つ道と中つ道を南北に、横大路を東西にしてそれを基準として区割りが行われ、東西にそれぞれ三坊延ばした条坊が先に作られていたとする。そして周礼

の天子方畿説に従ってその中央に藤原宮の中心が置かれたことを説かれている<sup>3</sup>。詳しいことは諸氏の論に譲るが、先に道路が作られ、後で藤原宮の位置が決められた根拠として藤原宮の発掘調査結果では先行する条坊の道路が埋められてその上に藤原宮が造営されていたという事実を指摘する。

大和三山は、この条坊の中に組み込まれており、必ずしも三山の位置が藤原宮の基準にはなっていないことがわかる。最初に藤原京の条坊を推定された岸俊男氏の小藤原京の京域は現代では完全に否定され、その後の発掘調査の進展に伴って大和三山を京域内に置く大藤原京が常識となっていると見てよい。また藤原京と類似する中国の都城はないという。三山がどのような思想的位置にあったかは出土木簡にも証拠がなく、少なくとも造営への影響は見出すことが出来ない。

とするとこの歌は、実際の藤原宮造営の事実には拠らず、国見表現を基本とした藤原宮讃美を主題とした文学的概念の上に成り立っていると考えなければならない。そこに辰巳氏の言われる新たな都市景観の出現ということになるかも知れないが、その中で問題となるのは、四周の山の解釈である。そこで古来の神観念の強く出ている「祈年祭祝詞」そのものを確認する。

### 三 祈年祭祝詞とその構成

祈年祭とは二月四日に行われる五穀豊穰を祈願する祭りであり、四次祭の中に入れられている朝廷にとって重要な祭りの一つである。延喜式祝詞所載のものであり、平安時代の祭祀の姿であるが、太政官では文武百官を前にして中臣氏が祝詞を唱え、地方では国司が官幣社に幣帛を奉っている様子がうかがわれる。『三代実録』に、

貞観五年二月四日丁酉、停祈年祭。並以有穢也。

三月五日丁卯、於神祇官修祈年祭。此祭例用二月四日而有穢停止。故今日祀焉

などとあり、停止記事はその後も元慶六年二月四日にもあるが、逆に言えば毎年行われていたことがわかる。

祈年祭そのものは『神祇令』に「祈年祭」とあり、また『続日本紀』には文武天皇慶雲三年二月庚子の条に

(前略) 是日。甲斐。信濃。越中。但馬。土左等

国一十九社。始入祈年幣帛例。其神名 具神祇官記とあるのが初出であり、『祝詞講義(次田閏)』には平安時代の『年中行事抄』などの儀式帳に天武四年に初めて行われた記事を紹介している。

全文を引用すると長くなるので、構成だけを以下に掲げる。構成名称は『祝詞講義(次田閏)』に準じる。

第一節 冒頭および天社国社に申す詞。

幣帛を奉る旨を述べる。

第二節 御年神に申す詞。

農作物や海の幸、献上する動物を供えて幣帛を奉る旨を述べる。

第三節 大御巫の祭る神に申す詞。

神魂以下八柱の神々に幣帛を奉る旨を述べる。

第四節 座摩(あかすり)の御巫の祭る神に申す詞。

皇居(邸宅)の敷地に坐す神々に幣帛を奉る旨を述べる。

第五節 御門の巫女の祭る神に申す詞。

御門を守るくし磐間門の命、豊磐間門の命に幣帛を奉る旨を述べる。

第六節 生島(国土の神)御巫女の祭る神に申す詞。

生く国、足る国の神に幣帛を奉る旨を述べる。

第七節 辞別として天照大御神に申す詞。

天照大御神に国土の繁栄と永遠を願って幣帛を奉る旨を述べる。

第八節 御縣に坐す神に申す詞

六つの御縣の農作物の安定を願って幣帛を奉る旨を述べる。

第九節 山口に坐す神に申す詞。

飛鳥以下六山に宮殿造営の材木を伐り出すための讃辞を述べる旨を述べる。

第十節 水分に坐す神に申す詞

吉野以下四山に御食事の水を供するために幣帛を奉る旨を述べる。

第十一節 辞別として神主祝部等に宣る詞。

幣帛を間違ふことなく奉る旨を述べる。

祝詞全体は目下の神職に告げる体裁になっている。現在見られる詞章は平安初期のものであり、藤原朝期のものであるとは言えない。尾崎暢映氏は大伴家持の「祈雨歌」に祝詞詞章の一部が取り込まれているとして、奈良時代中頃には現在の詞章と同じになっていたと説かれる<sup>4</sup>。また粕谷興紀氏は「別辞」について詳しく言及され、本来は各節が独立していたこと。別途延喜式所載の「月次祭祝詞」がその本来的なものであったこと。天照大御神奉幣の「別辞」は奈良時代に挿入されたものであること。また第六節の生島も本来難波で行われていた祭祀が合わされたことを論証されている<sup>5</sup>。従って、藤原朝時代の「祈年祭祝詞」と延喜式所載のものとは必ずしも本文が一致しているとは言えないが、主となる内容は大きく異なっているとは考えられない。

上記構成の太字の対象が「藤原宮御井歌」にも示されるものであるが、このことは次章で述べたい。

祈年祭の目的は五穀豊穰祈願のために神々に奉幣することにあり、祝詞詞章はそのことを目的として記述されている。しかし「藤原宮御井歌」と共通する対象物は、歌詞と観念的に共有していると考えられる。このことを

基本にすると、単に文学的な歌詞の解釈だけではなく、祭祀的概念を持った意味を汲み取って歌をとらえなければならぬであろう。そこには歌詞から読み取る観念だけではなく、当時の詞の持つ意味が祝詞の示す意味も含んでいると考えなければならないからである。

そこで、次に「藤原宮御井歌」の特に四周の山の概念について、祝詞詞章の詞の概念を加えた場合のとらえ方を示してみたい。

#### 四 祈年祭祝詞から見た山の観念と藤原宮

歌は、天皇の国見儀礼を描くことから始まる。歌い出しである「やすみしし 我ご大君 高照らす 日の皇子」は、日神信仰に基づく高天原信仰が象徴化して示されていると言われている。それは人麻呂が完成させた歌詞であるが、その背後には高天原を中心とする天つ神信仰の成立があって、それが大君への観念につながっている。要するに祈年祭の皇祖神への讃辞は、天神信仰が制度化された後に定着してくる概念であって、それが祝詞詞章となっていると言える。また当然のことながら天照を始めとする皇祖神および天皇は農耕神の象徴であり、御歳神に象徴される性格が付与されている。

長歌の構成は、大君の国見行為を述べて、周囲の様子を叙述し、最後に讃美対象を示して終わっている。その点では、人麻呂の吉野離宮歌の二首目の長歌と似ている。しかし人麻呂歌では山川の神々も大君に奉仕することを述べて神の御代と讃えているのに対して、「藤原宮御井歌」は、四周の御門、山々の叙述から宮殿の清水の永遠性を述べて讃美表現になっており、国見をする大君の姿が途中で消えている点に相違がある。

また表現の特徴として「藤原宮御井歌」で方位を示す言葉は特殊である。諸注釈が引用しているように『高橋氏文逸聞』や『成務紀』に記載されるのと同様の言葉を用いている。ただ『万葉集』の儀礼歌には四周の景を述べる構図がない。それだけにこの歌の特殊性がある。

吉野政治氏は、この方位表現について『周礼』によれば東は太陽の昇る場所。西は太陽が停滞する場所としての表現であり、中心である宮殿に太陽が集中する意味を持たせていると説かれるが<sup>6</sup>、表現の特殊性を考えるとそういった意味も含まれているかも知れない。

祝詞には「藤原宮御井歌」に描かれる香具山がない。一方で御井歌には伊勢大神がなく、また磐余などの山々の叙述がないという少々ずれが認められる。伊勢大神は先述の粕谷興紀氏の論から、まだこの頃の祝詞には含まれていないということで理解出来る。もちろん対象物の相違は両者の目的の相違でもある。「藤原宮御井歌」は、藤原宮讃美を国見的な描写で描かれているのであって、四方の山に囲まれる藤原宮という「籠もる」に通じ

る概念があるので、磐余などの山々は不要である。しかし一方で「藤原宮御井歌」は歌であるので、祝詞詞章とは異質であり、歌詞の文脈上の意味の相違も踏まえておかなければならない。

そうした中で大きな相違は祝詞には香具山が登場しない。祝詞に登場しないのは、和田嘉寿男氏が説かれるように<sup>7</sup>、聖山視が後世磊落していったことが原因であるとも考えられる。和田氏も説かれるように、舒明天皇国御歌（巻2・2）は国見を行う聖山としての概念が基底にある。しかし大伴旅人の

帥大伴卿歌五首

忘れ草我が紐に付く香具山の古りにし里を忘れむがため（巻三・三三四）

や

いにしへのことは知らぬを我れ見ても久しくなりぬ  
天の香具山（巻七・一〇九六）

には、聖なる山という概念が抜けている。旅人歌は飛鳥故郷を偲んでいる歌であり故郷の象徴として香具山があるだけである。二首目の上句の「いにしへ」とはかつての藤原や飛鳥の宮都のことを指していると思われるが、香具山には聖なる山というよりは、その時代を知らない世代である自分が見ても古く神さびた香具山という意味で歌われており、飛鳥時代の象徴という意味で存在しているに過ぎない。

歌は日の御子が埴安池の堤で国見をするという場所から始まる。国見は舒明天皇の国見歌に見られるようにその場所は聖なる場所である。ということは埴安池は国見をすべき聖なる場所であったという観念があったということになる。

埴安池は当時香具山の麓にあったと見られている池であるが現在は存在しない。現在、檀原考古学研究所による埴安池の碑が香具山西方に建てられている。しかし池の周囲を推定すると和田嘉寿男氏に詳しい説明があるように<sup>8</sup>、それほど大きな池ではなかったらしい。香具山南に南浦という地名が残っており、そこが南端であったと推定される。しかし香具山と藤原京のある境域とはあまり距離がないので、香具山の麓の等高線に沿った南北に細長い池であったことが推定される。そこに飛鳥川が注いでいたと堀内一民氏は推定されている<sup>9</sup>。現在香具山の西麓には、式内畝尾都多本神社（泣沢女の森）、少し北に同じく式内畝尾坐健土安神社があり、現在地と同じであるとするとこの辺りが池の北岸になると推定される。香具山の麓の形状に沿った形で池の東側は岸辺となっており、国見幻視説をとらないならば、海に見立てることもあながち出来なくはない。

ただこの埴安という地名が問題である。神武紀には神日本磐余彦命が大和を平定するにあたり、神託により香



具山の山頂の土を取って、平瓮や巖瓮を作って天神地祇を祀ったと記されている。また崇神紀には、建埴安命の反乱の際、妻である吾田媛が土を領巾に包んで「大和の物実」と呪詛して密かに持ち帰ったという記事がある。物実とは、代表であると解されているので、香具山の土は大和を象徴したものという観念のあったことがわかる。ここに埴安池のことは出ていないが、「埴安」とは、土を鎮める意味であると解せられ、聖なる場所として見られていたであろう。

この伝承がいつの時代に成立したかは明らかではないが、少なくとも香具山を聖山と見る時代に観念されてきたものであろう。香具山は舒明天皇前後は聖山と見られていた事は確かであるので、藤原時代も聖山としての観念はあったと思われる。

国見の場所は埴安池の堤であるので、正確には土を採った場所であるとは言えないが、歌の言い方からは藤原宮の真東であると推定されるので埴安池の北端である可能性は高い。とすると畝尾坐健土安神社に近い場所であり、神社の位置が当時と同じであるとするならば、この場所付近が物実としての埴を採取した場所であり、この付近が国見の場所であったと推定される。

この土を採ることは前記和田嘉寿男氏も紹介されているように、『住吉大社神社記』には畝傍山の山口神社で埴を採る神事があったことが記されており、香具山から畝傍山に移ったと考えられる。とすると埴安池の堤であったとしても意味があり、埴採取の伝統があり、ここが国見の場所の聖地として認識され選定されたと推定出来る。

次からは具体的な四周の叙述になるが、国見歌表現をとっていることを考慮すると幻視的な景物描写になっていることを考えておかなければならない。必ずしも実景描写であるとは言えない。

香具山の表現は、言うまでもなく日神信仰を基盤とした大和の中心の聖山としての観念を持つことから「大和の」が冠される。多く論があるように「春山」としての概念を持つ。西郷信綱氏が言われるように天の岩屋戸神話が香具山の日神祭祀に基づいて当時の太陽復活祭祀に原型があるとするならば、冬至から春に至る観念が香具山にあるわけで、春の観念は当然のことであろう。また陰陽道における「東」が春に当たることも後押しをしている。しかし後に続く畝傍や耳成の山に季節的なことが表現されていないので、東にあるから春という観念になっているとは必ずしも言えない。香具山が春山とされていったことは和田嘉寿男氏の論に詳しい。額田王の春秋優劣歌において「山を茂み」と春を述べていることから「茂る」と描写されていることは言うまでもない。

畝傍山は歌では「瑞山」と二回形容され、「山さぶ」

と表現されている。原文は「美豆」であるが、「瑞」と解釈され、「瑞」は「瑞穂」「瑞垣」という複合語として示される。「みづ」は水々しいとか若いというのが本来の意味としてあることは認められるが、そのことから派生して、『日本書紀』には天武朝から持統朝にかけて、「瑞祥」記事が多くあり、「瑞」は吉祥をもたらすという意味で用いられている。また祝詞にも「皇御孫命乃瑞能御舎」という例が多く、栄える意味や靈妙という意味に解される。従って「美豆山」とは、「瑞山」と解し、繁栄をもたらす山であるとともに、靈妙な吉祥の山という意味で用いられていると考えて誤りはないであろう。

一方で祈年祭祝詞に示される「畝傍山」は、「第九節 山口に坐す神に申す詞」として記述されており、現在も式内畝傍山口神社が存在する。

具体的に第九節の本文（訓読文）を示す。「六月の月次祝詞」も同文である。

「山の口に坐す皇神等の前に白さく、飛鳥・石村・忍坂・長谷・畝火・耳無と御名は白して、遠山・近山に生ひ立てる大木・小木を、本末うち切りて持ち参る来て、皇御孫の命の瑞の御舎仕へまつりて、天の御蔭・日の御蔭と隠りまして、四方の国を安国と平らけく知ろしめすが故に、皇御孫の命のうづの幣帛を称辞竟へまつらく」と宣る。

祭祀的に宮殿の用材を切り出す山としての観念がある。従って単に西の守りとして鎮座しているという意味ばかりではなく、宮殿の用材を切り出す吉祥の山としての意味があると見てよいであろう。

北の耳成山もまだ同様である。祈年祭祝詞には畝傍山同様宮殿の用材を切り出す山として山口神社への奉幣を述べており、現在も式内山口神社が存在する。ただここで注意しなければならないのは、「青菅山」と言っている点である。諸注釈は「山菅」の生えている山の形容としているが、水辺の菅を指しているであろう。和田嘉寿男氏は、当時耳成山麓の東側には米川という小川が流れていて湿地帯になっていたと解説する。推古紀九年の条に以下の記事がある。

夏五月に、天皇、耳梨の行宮に居します。是の時に大雨ふる。河の水漂蕩ひて、宮庭に満めり。

耳成山の行宮が大雨によって浸水した様子を記述したものである。和田氏は、この川を米川と推定されている。となると水性の菅が生えていることは十分考えられ、祓えに使用される菅のことであろう。このことは堀内一民氏も触れられているが、祓えに使用される菅は、菅笠や菅畳の材料となる水辺に生えるイネ科の植物であると多く説明されている。

この菅は六月の晦の大祓祝詞にも登場する。

天つ金木を本うち切り末うち断ちて、千座の置座に

置き足はして、天つ菅麻を本苅り断ち末苅り切りて、  
八針に取り辟きて、天つ祝詞の太祝詞事を宣れ。

「すが」については以前に、スサノヲの清宮、播磨国風土記「菅生」、仁徳記矢田若郎女の歌謡「清し女」に呪的詞章から派生して「すがすがし」が成立していることを説いたことがある。従って『万葉集略解』が「宣長は菅は借字にてすがすがしき意なるべしと言へり」と言っている宣長の見解はそういった意味で当たっていると思われる。ここでは一年中青くすがすがしい山であるとともに祓えの具を連想する山の概念もあると認められる。

ただ実質的にはこの二山から用材を切り出すことが出来たかどうか疑問である。「藤原役民歌」は、山城の田上山の御料地から切り出す様子が描かれている。当初は周辺からであったのが、次第に遠方になって行ったとの意見もあるが、藤原宮時代にあっては実際に切り出すにも用材はなかったであろう。従ってこれは祭祀の行為を本に述べられていると思われる。祝詞には宮殿を守る神として、「あすは神」と「はひきの神」の神名が出ている。「あすはの神」は『万葉集』にも用例がある。

庭中の阿須波の神に小柴さし我れは斎はむ帰り来までに（巻二〇・四三五〇）

防人歌の一首である。若麻績部諸人と作者名が掲げられている。「我れ」は作者本人であるのか、家人であるのかは正確にはわからないが、ここに「小柴さし」と言っている。あすは神を祀る方法として、木の枝や先端部分を刺して祀るという方法であったことが知られる。となると、木の先端を祀るものであり、儀礼的に山口神社から一本の木の先端を切り、宮殿に持って行ったものであろう。そうであるとするこの二山が宮殿を守る神として讃えられる関係にあったと見ることが出来る。

南に位置する吉野山は、「名ぐはし」と形容される。この語は万葉集中に他に二例あり、いずれも地名にかかり、讚美表現となっている。ただ南に位置する吉野山は他の三山に比して実景としてはかなり遠方である。しかし祝詞には水分山として、第十節に宇陀、都祁。葛木とともに掲げられている。

ただ祝詞における水分山の意味は、周辺の農作物への水の供給とそこから収穫される稲の新嘗と大御食に供する様子を述べていて、必ずしも宮殿の水への奉仕は述べられていない。しかし宮殿の御井の水も同様に祭祀に供されるものとして等しい観念を持ったものと理解される。城崎陽子氏も水分山としての意味があると説かれ、水源として存在する青根が岳を意識しているとされている<sup>10</sup>。

藤原宮の南に近侍する山は祝詞の第九節にもあるように飛鳥座神社の山々、南淵山も含む『万葉集』に見られる飛鳥の神奈備山等、また高取山等が直接見える山とし

て掲げられるが、歌では水の供給という存在から遠方の吉野山を配したと考えられる。もちろん吉野水分山は吉野川水系であり、大和川水系の藤原宮とは異なるが、高取から龍門の山嶺を隔てても遠方の吉野山を描くのは御井の清水の祭祀的同一性ととの関連で歌句に入れられたと見ることが出来る。

それらと御井との間には、御門が介在している。祝詞にはここにくし磐間門の命・豊磐間門の命が宿り、「御門祭祝詞」にもあるように昼夜邪霊からの守りとして鎮座している様子を描く。御門を描くのは宮殿の守りとしての塞ぐ施設としての意味を持つが、問題はこの門外に三山と吉野山があるとする歌の構図である。もちろん歌の視点として、宮域外からの国見構図であるので、門が入れられるし、方角を示す意味もある。しかしここには祭祀における門の神の存在を意識して、四山のみのお神霊を受け入れるという意識があるであろう。宮殿の用材や水という宮殿を形成する祭祀における空間が意識されているとみられるからである。

歌は宮殿自身を「高知るや 天の御蔭 天知るや 日の御蔭」と表現する。この語は祝詞にも、当該「祈年祭祝詞」、「六月の晦の大祓」、「崇神を遷し却る」の三例見える。この歌が祝詞詞章で表現される理由は、祭祀的な観念で宮殿を示す目的であると思われる。

祈年祭祝詞には、

「座摩の御巫の辞竟へまつる、皇神等の前に白さく、生く井・栄く井・つ長井・あすは・はひきと御名は白して、辞竟へまつらば、皇神の敷きます、下つ磐ねに宮柱太知り立て、高天の原に千木高知りて、皇御孫の命の瑞の御舎を仕へまつりて、天の御蔭・日の御蔭と隠りまして、四方の国を安国と平らけく知ろしめすが故に、皇御孫の命のうづの幣帛を称辞竟へまつらく」と宣る。

と宮殿に鎮座する神々への奉幣が述べられていて、先ほども掲げたように宮殿には井戸の神々、あすは神やはひきという名前の神などが存在する。そしてその中心には井戸がある。井戸には二神が鎮座し、奉幣の対象となっている。この祭祀的実態を示すには、「大宮」などの万葉集的表現では合致せず、背後には宮殿に鎮座する神々の存在を裏付ける表現が必要となったのであろう。従ってこの祝詞における表現が使用されたと考えられる。

またこの清水は自然湧水の泉であるという論もあるが、ここは祝詞詞章に示されている井戸のことであり、最も重要な中心施設を指している。そこには「座摩の御巫」が祭祀を司っており、従って短歌の「処女」となっている。

このように御井歌に登場する対象と祝詞の同一の対象を比較するとき、歌の指し示す対象には祀るべき神々が

宿り、実態として歌詞の背景には祭祀を基盤とした観念があると思わなければならない。しかしそれらを「とこしへにあらめ」や「羨しきろかも」と讃えるのは歌の世界であり、文学的な表現として成立していることを考えなければならないであろう。

## 五 まとめ

以上のことを歌の「読み」に反映させると、藤原宮の四方の山の叙述と宮殿の関係は、以下のような読み取り方が出来る。

大和の物実として中心に存在する香具山は木立も青々と茂っていて東に鎮座し、東の御門の神もその山霊を受け入れる。

畝傍の吉祥をもたらす瑞々しい山は、宮殿の用材を切り出す山にふさわしく山らしくして、西の御門の神もその山霊を受け入れる。

宮殿の用材ばかりでなく、新鮮な祓えの具も育てている耳成山は、その山霊も立派であり、北の御門の神も受け入れる。

名前もよい吉野の山は水を供給して豊穡をもたらす神霊の山として、南の御門はるか遠くにおられる。

歌に描かれる畝傍、耳成、吉野の祭祀的意味を汲み取りながら解釈すると以上ようになるであろう。祈年祭祀詞は一年の五穀豊穡や国家安泰を言祝ぐ春の祭祀行事である。従ってそれを下敷きにすることは、この歌の主題とも一致している。このようにみると古来の神の存在を山の観念ととらえ、藤原御井を言祝ぐ意味を持たせているということは十分にとらえることが出来る。

祭祀の言葉と歌の言葉が交錯する時は、単に文学的表現に位置しているだけではなく、内容的には祭祀の意味も含んでいることに留意しなければならない。当時の現場的享受の背景には祭式も含めた語の概念で理解されていたと考えられるからである。他に人麻呂の吉野離宮歌などに見られる自然描写も同様であると考えられる。祝詞詞章と万葉歌句とは性格の違いはあるが、対象とする物には神々が宿り、その観念が歌の背景にあって、しかしそれが明確には表現されていないことに「藤原宮御井歌」の文学的特徴があるということを指摘しておきたい。

<sup>1</sup> 「『藤原宮御井歌』の特異性と中臣氏」土橋寛『万葉集の文学と歴史』昭和63年6月 塙書房

<sup>2</sup> 「藤原宮御井歌」中西進『万葉と海』角川書店 平成2年4月

「万葉集における持統朝・序説—藤原宮役民歌・御井の歌を中心に—」吉田義孝『国語国文学報（愛知教育大学）』42集 昭和60年3月

「都城の景観」辰巳正明『万葉集と比較詩学』平成9年4月 おうふう

<sup>3</sup> 「古代都市「藤和京」の成立」小沢毅『考古学研究』44巻3号 1997年12月

「藤原京の神話地理学」椎野禎文『季刊 東アジアの古代文化』114号 2003年2月

<sup>4</sup> 「延喜式の祈年祭祀詞について—その成立の時代—」尾崎暢映『古代文学』23号 1984

<sup>5</sup> 「祈年祭祀詞についての一考察」粕谷興紀『万葉』94号 昭和52年4月

<sup>6</sup> 「藤原宮御井の歌の『日軽大御門（ひのたてのおおほみかど）』と『日緯大御門（ひのよこのおおほみかど）』について」吉野政治『万葉』21号 平成24年11月

<sup>7</sup> 「天降りつく天の香具山」和田嘉寿男『大和三山 紀記万葉の世界』昭和63年10月 桜楓社

<sup>8</sup> 「埴安池と哭沢の森」和田嘉寿男『大和三山 紀記万葉の世界』昭和63年10月 桜楓社

<sup>9</sup> 『大和万葉旅行上巻』堀内一民 昭和39年11月 角川書店

<sup>10</sup> 「藤原御井歌—発想の源泉をめぐって—」城崎陽子『美夫君志』43号 平成三年10月